

大学図書館がつなぐ「地域」と「戦争・平和」

—企画展「戦争と平和を考える2014」より—

島根大学学術情報機構附属図書館

情報サービスグループ 小林 奈緒子

はじめに

近年、大学図書館における企画展の開催が積極的に行われている¹⁾。大学図書館における展示の重要性やその意義について、例えば米澤誠は、①展示観覧者・利用者にもけた啓蒙活動としての展示、②図書館・大学の広報活動としての展示、③図書館職員の人材育成活動としての展示と分類し、提示している²⁾。この米澤の分類について、篠塚富士男は「啓蒙・公開活動としてのみ考えがちな従来の考え方・発想からの転換が示されているが、これによって、図書館展示には視点の違いによって多様な意義を見いだせることが明らかとなった」と指摘している³⁾。また篠塚は、米澤の分類を「展示のねらい」と表現し直し、①啓蒙活動の意義として「資料への興味・知識欲の向上・図書館資料の活用」、②広報活動の意義として「社会へのアピール・地域貢献」、③人材育成活動の意義として「企画力・専門的知識・活性化」があると述べている。

島根大学においても、大学憲章の理念を表す言葉として「人とともに、地域とともに」と定めている⁴⁾ように、積極的に教育・研究成果を地域に還元しないしは公開しており、附属図書館もその例外ではない。所蔵している資料や学修環境の提供はもちろんだが、松江の近代美術史家であり事業家であった桑原羊次郎のコレクションをはじめ、大乘仏教の論書である大智度論や堀尾期松江城下町絵図、小泉八雲関係資料といった貴重資料を、企画展での公開や、デジタル資料としてデジタルアーカイブにて公開している。今回、本稿では2014年夏に開催された企画展「戦争と平和を考える2014」の報告を軸としながら、「地域」と「戦争・平和」をつなぐ大学図書館の役割について考えてみたい。

1 企画展の概要

1.1 図書館界での「戦争と平和」

今回の企画展では「戦争と平和」をテーマとしたが、そもそも、図書館界ではこのテーマに関して、これまでどのように議論されてきたのだろうか。考察の手掛かりとして、日本図書館協会が発行している『図書館雑誌』の特集を見てみた。『図書館雑誌』を対象としたのは、同誌がその時々日本の図書館界を俯瞰できる代表的な雑誌の一つであり、他の雑誌と比較しても同テーマに関して多く特集を組んでいたためである。

表1のように、『図書館雑誌』では例年8月号において「戦争と平和」の特集を組んでいた時期があった。1980年代、90年代である。90年代では、90、91年については特集から外れた⁵⁾ものの、その後92年～99年までは同様のテーマで特集を組んでいた。2000年以降は、特集として組まれることはないが、時折関連する内容の記事や論文を紹介していた。

1980年代に図書館界で戦争と平和についての議論が盛り上がった背景として、1984年が一つの節目の年であったためと考えられる。図書館界では、まず1954年に、全国図書館大会において「原子兵器禁止に関する各国図書館界への訴え」が採択された⁶⁾。少し長いが、以下引用する。

「今や人類はあらゆる困難と戦って原子兵器の禁止を実現しなければならない時期に到達していると考え。我々日本の図書館人は……世界各国の人民に向って原子兵器が禁止されるべきであることを訴えたい。……(中略)我々は我々と同じ仕事にたずさわる世界各国の図書館人に対してこれを訴える事が人類の平和にして光栄有る生存に直接寄与すべき我々の仕事の性質からいって、当然の義務と考えるものである。」

この訴えより、村上美代治は「日本の置かれた状況、あるいは職業倫理から世界のリーダーシップの役割を果たすべきであることの表明がされており、戦後の図書館史において大変重みのある決議」であると指摘している⁷⁾。この1954年は、マグロ漁船第五福竜丸のビキニ被爆が起きた年であり、全国的に原水爆禁止の世論が盛り上がった年である。それから30年目にあたる1984年を目前に控えた年、図書館員有志により幾度か会合がもたれた後、1985年に先述した「原子兵器禁止に関する各国図書館界への訴え」の理念を

受け継いだ、「図書館反核平和の会（正式名：核兵器をなくし平和を求める図書館関係者の会）」が誕生した。同会の会則では、図書館が発展するには、核の存在しない平和な社会の構築が不可欠との認識を鮮明に打ち出している⁸⁾。

また、村上はユネスコ憲章の「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」という点に関して、図書館の果たすべき役割が「非常に重大」であることを指摘しており、「資料提供という活動を通して、利用者に情報を提供する行為に図書館の使命があり、図書館員はその要」でなければならないと述べている⁹⁾。この村上の指摘は現在にも通じるものであり、その理念は館種を超えて共通する部分であろう。村上は他にも、「図書館員の立場で核兵器の廃絶と世界恒久平和に向けた運動の展開こそ、同会の存立基盤である」と同会設立の趣旨を説明している¹⁰⁾。ここでは紙面の都合上、同会の活動や図書館史における同会の歴史的意義といった点についての具体的な検討はしないが、その後、同会は2004年9月に『『図書館九条の会』へ発展的な合流を遂げ¹¹⁾』ている。

このように、図書館界でも戦争と平和に関する議論の盛り上がりは80年代～90年代に見られたことがわかったが、2000年以降になると、この議論はほとんどみられなくなる。『図書館雑誌』でも特集として組まれることはなくなり、時折関連した記事が掲載されている程度であった。

一方、大学図書館においては、公共図書館同様、図書の展示をはじめ様々な企画展が行われているが、大学図書館における企画展の取り組みに関する事例紹介の中で、特に「戦争と平和」に関する企画展についての報告は、管見の限り事例として確認できなかった。しかし、直接的には関係しないが、例えば広島大学の尾崎文代らの北欧平和学図書館調査報告において、興味深い指摘があった。

尾崎らは平成16年度広島大学後援会国際交流助成事業として、ストックホルム国際平和研究所、オスロ国際平和研究所など北欧3カ国の平和学研究所図書室・大学図書館等を訪問した際の調査研究を報告している。その中で出会ったライブラリアンとのやりとりを通して、「平和学を学ぶ学生・研究者を支援するために図書館員のまずなすべきことは、今回出会った平和学のサブジェクトライブラリアンの言葉どおり、『世界で何が起きているのかに敏

表1 『図書館雑誌』8月特集一覧

1946	なし	1981	民衆史発掘・記録の運動と図書館
1947	なし	1982	8月によせて・図書館のもう一つの役割を考える
1948	なし	1983	アジアを視る目
1949	なし	1984	反核・平和の運動を考える
1950	なし	1985	戦後40年の歩みのなかから―「21世紀への図書館」のために
1951	なし	1986	国際平和年に寄せて―図書館と平和問題とのかかわり方は?
1952	なし	1987	国家秘密法と図書館の自由
1953	なし	1988	図書館から問う戦争と平和 1988
1954	第7回全国図書館大会議事録・『原子兵器禁止に関する訴え』(7月号)	1989	図書館から問う戦争と平和 1989
1955	なし	1990	図書館の異文化サービスを考える
1956	オートメーション特集	1991	異文化サービスの実際
1957	なし	1992	図書館は戦争にどうかかわったか
1958	小図書館(公共)の問題	1993	図書館から「戦争・平和」をみる1993
1959	特集なし(図書館大会議事録・日本図書館協会総会議事録)	1994	図書館と戦争関係資料
1960	特集なし(図書館大会議事録・日本図書館協会総会議事録)	1995	図書館の戦後50年を問いなおす
1961	特集なし(日本図書館協会総会議事録)	1996	戦争関係資料へのアクセス
1962	なし	1997	日本国憲法50年と図書館
1963	なし	1998	図書館と子ども―未来へのメッセージ
1964	なし	1999	歴史を風化させない試みを考える―戦争資料と図書館
1965	通号500号記念特集・敗戦前後の図書館	2000	予約サービスと図書館間協力の現在
1966	図書館シリーズ・戦後21年―図書館員活動の総括 座談会・戦後21年をこう受け止める	2001	図書館の話題a la carte
1967	最近の展望 公共図書館をとりまく状況の諸相	2002	市町村合併と図書館
1968	公立図書館の司書職制度	2003	図書館の話題a la carte
1969	図書館と機械化	2004	大学図書館2004
1970	なし	2005	個人情報保護と図書館
1971	なし	2006	変わり目にある図書館
1972	児童図書館	2007	図書館評価を問いなおす
1973	なし	2008	全国図書館大会への招待
1974	図書館サービスとしての複写	2009	YAサービス新世紀
1975	なし	2010	全国図書館大会への招待
1976	なし	2011	東日本大震災と図書館
1977	アジアの図書館	2012	観光ポータルとしての図書館
1978	なし	2013	「中小レポート」50年
1979	NDC50年	2014	図書館の話題a la carte
1980	戦争と図書館資料		

感になること』であろう」ことを確信している。そして「それは、世界で起きていることを知り、問題があるならその原因はどこにあるのか、望ましい状態とは何か、その状態とするためには何をすべきかを考察することに通じる姿勢、すなわち『平和学への第一歩』であろう」と述べている¹²⁾。この尾崎の「平和学」に接する図書館員の意識のあり方については、後述する企画展で得た筆者の感想と共通していると思われる。

1.2 企画展開催の経緯と開催趣旨

戦後70年を目前に控えた2014年の春、当館に「山陰中国帰還者連絡会資料」（以後「山陰中帰連資料」）を寄贈していただいた難波靖直氏が他界された。難波氏は、自分たちの活動の記録を、広く地域の人々に見てもらいたい、そして大学図書館に寄贈することで教育・研究に供してもらいたい、と強く願っていた。

中国帰還者連絡会（略称・中帰連）とは、戦後旧ソ連に抑留されたのち戦犯として中国へ引き渡され、撫順・太原戦犯管理所に収容された日本軍兵士が、罪を許されて日本に帰国した後、自分たちの戦争体験を加害の視点で伝えていくこと、そして日中の友好を築いていくことを誓って1957年に結成された組織である。当館に所蔵している資料は、中帰連山陰支部（後に山陰中国帰還者連絡会へ改称）の活動記録およびその関係資料である。同資料は、長年事務局長を務めていた難波氏が保管されていた物であり、2013年当館に収蔵した。資料からは、帰国後会員たちがどのような状況で互いに励まし合い、助け合って戦後を生き抜いてきたのか、当時の社会状況や地域社会の様相がよく分かる。また、地道な平和活動を続けてきた活動記録は創刊号から現在まで欠けることなく保存されており、これらを紐解くことで、戦後山陰の平和運動の一端がみてとれる。何より、これらの資料は地域の人々にとって、同郷のごく「普通の人々」が、戦争によって兵士となったことで人生を大きく変えられたことや、その後の彼らの歩んだ人生を知り、彼らを地域社会がどう受け止めてきたのか、詳細に教えてくれる。地域にとって歴史の重みを実感できる、貴重な史料といえるだろう。だからこそ難波氏は、出来るだけ多くの地域の人々にこの史料を見てもらいたいと願っていたのである。

このような資料の収蔵に加え、企画展を開催するに必要な環境が整ったこ

とも、開催のきっかけの一つである。同資料が寄贈された翌年（2012年）に本館の改修が行われ、新たに「展示室」が設けられた。また、2013年春のリニューアル後、ようやく業務も落ち着いてきたことから企画案を構想し、2014年夏に展示を開催した。今回の企画展では、近代以降の松江と戦争との関わりに焦点を充て、この中で山陰中帰連資料の一部を解説・紹介した。地域の歴史を振り返りつつ、展示から「戦争とは何か、平和とは何か」を考える機会の一つとなることを企図したものである¹³⁾。この点については、後ほど詳しく述べることとする。

1.3 準備と構想

まず、企画展を計画するに当たり、資料について知ることから始めた。資料がどのような物で、どのような事が書かれているのか、自分が分かっているなければ展示は出来ない。そこで、資料の寄贈申し出があった際に、核となる資料については個人的に撮影を行う一方、資料について寄贈者からそれぞれ詳細な解説をいただいた。撮影に関しては、資料保存の観点と、個人的に資料を読み込み、分析を行うという二つの理由があった。

その後資料を分析し、史料紹介として一つの研究ノートにまとめ、発表した。投稿先は学内の法文学部山陰研究センター紀要『山陰研究』を選んだ。資料が地元・山陰地域のものであることから、将来的に法文学部の教員や関係者が資料を有効活用してくれることを期待してのことである。また、学内で発行された紀要のほとんどは、鳥根大学学術情報リポジトリSWAN¹⁴⁾で広く公開されるため、一般の人でも比較的容易に論文を入手することが出来、資料の利用につながると考えたからであった。詳しくは拙稿をご覧ください¹⁵⁾。

このように資料を全体的に俯瞰・把握した後、実際にどの資料を使ってどのような展示にするのか、その構想を考えた。企画展を開催する場合、附属図書館では各担当から1～2名程度が集まって組織された、広報チームがその企画・運営を担当している。そのため、まずは自分の大まかな企画案のスケッチを2013年の冬に提出し、2014年度に入ってからスケジュール調整をしながら日程を決め、正式な企画案としてまとめた。

1.4 展示の工夫

展示にあたり留意・工夫した点を、以下①時期、②広報、③内容、④方法に分けて述べたい。

まず①時期については、当初より夏の開催を予定していた。このテーマに関しては、毎年夏に各メディアも特集を組む事が多く、人々が平和を意識する事の多い時期と考えたからだ。しかし、企画展に一番来てほしい学生は、8月上旬で前期試験も終了し、図書館にも来なくなる。そのため、7月1日から夏季休業が終了するまでの期間、開催することとした。

次に、②広報については、従来の広報ツールである図書館HPをはじめ、ツイッター、ニュースレターLiMe(ライム)、デジタルサイネージ等を使って周知した(写真1)。また、報道機関宛に、大学の総務部・広報を通じて企画展の案内を配布した。また、知り合いの地元紙の新聞記者には、別途案内メールも送った。結果、地元紙をはじめ3社が取材に来場し、記事として掲載された。これらを読んだ地域の人から企画展の問い合わせもいくつかあり、また実際に足を運んで下さった方もいた。

③内容については、開催の趣旨とも関連することだが、この点が一番苦慮した点である。最初の構想では、戦争の歴史について解説し、日中戦争、アジア太平洋戦争の流れで山陰中帰連の資料を展示する、という事を考えていたが、それではあまりにも大まかすぎて、見る側は面白くないのではないかと思いついた。開催するにあたり、一番展示を見てほしいのは若い人々、つまり学生である。しかしながら、戦争と平和をテーマにした展示に来場してくる人々は、おそらく一般の地域の年配の方が多数ではないか、と考えた。というのも、当館ではもともと地域の人々に図書館を開放しており、特に公開授業等を聴講に来る地域の人々が、授業の合間によく図書館を利用していた。2014年4月から始まった市民パスポート会員制度により、一般の人の比率は更に増したと実感している。そのため、学生が見ても、地域の方が見てもなじみやすい内容でないと、せっかくの展示資料も活かしきれないのでは



写真1 企画展ポスター

ないかと考えた。そこで、近代松江という枠組でストーリーを展開させることにし、より身近な地域の歴史の中の資料として、山陰中帰連資料を紹介することにした。こうすることで、来場者と資料の距離がより近くなることを企図した。

また、展示パネルを作製するに際し、一つのコラムを設け、解説を充実させた。コラムでは、「松江と歩兵第六十三連隊」と題し、当時の写真と、現在も残る同連隊関連史跡の写真を、地図上で解説した(写真2)。近代松江では、当時の松江市長福岡世徳の振興策の一つとして兵営の誘致があり、それが実を結び、1908(明治41)年に陸軍歩兵第六十三連隊が松江市長志原に入営したという歴史がある¹⁶⁾。

このため、現在の緑山公園をはじめ、いくつか関連史跡も存在し、地域の人々にとって同連隊の歴史は現在も身近に存在するからである。このコラムを見て、よく行く公園がかつて陸軍墓地であったことを初めて知った、と話してくれた来場者もあった。

最後に④展示方法について工夫した点として、当館の資料だけではなく、



写真2 企画展のパネル

山陰中帰連の後継組織である「山陰中帰連を受け継ぐあさがおの会（以後、あさがおの会）」が所有する関連資料も展示期間借り受け、展示することが出来たことがあげられる。当館では所蔵していない関連図書も多く、中帰連の活動を知る上で、大変貴重な機会となった。特に『覚醒¹⁷⁾』という、戦犯教育を記録的にまとめている図書



写真3 展示の様子（奥がDVDデッキ）

については、日本軍兵士が繰り返した残虐な光景をそのまま写真に収めており、衝撃を受けた来場者もあった。他にも、中帰連の活動を知る『季刊中帰連¹⁸⁾』も、創刊号からほぼ全て借り受け展示した。これら二点については、あさがおの会からの要望で、来場者がすぐ手に取れるところに展示し、自由に閲覧できるようにした。

中でも、今回展示では実験的に、山陰中帰連で撮影・制作した会員の戦争体験を記録した証言ビデオを許可を得て常時放映した（写真3）。また、難波氏へのインタビューを撮影・記録したDVDも、証言ビデオと交互に放映した。これらは来場者に好評で、特に地域のご年配の中には、自分の戦争体験と重ね合わせて、様々な思いを持って視聴した後、感想を筆者に語ってくれる人もあった。

その他、今回は展示目録を作成し、パネルや記録史料、図書、雑誌に分けてリスト化した。パネル以外の展示史料については、その所蔵場所を明記した。

2 企画展の課題

2.1 アンケート分析

企画展を開催した後、様々な検証を行うため、来場者にアンケートを求めた。アンケート用紙は2種類用意し、一つは当館で過去に開催された展示で実施したアンケート用紙と同じ物を用意した（来場者アンケートその1、写真4）。これは、シートに所属が明記されており、来場者に自分の所属にシー

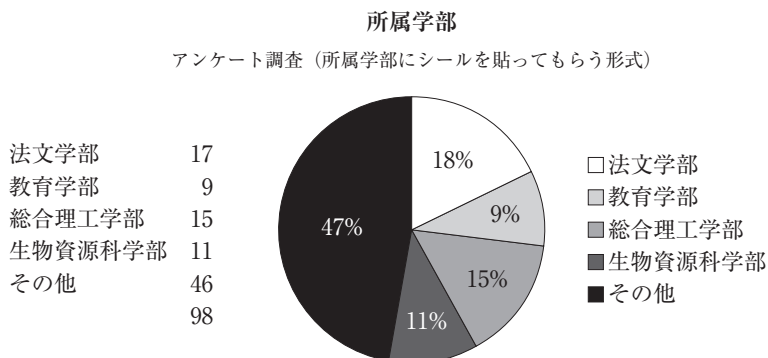


図1 来場者アンケートその1

し増やし、「学外者」の項目を設けておくべきだった事である。

一方で、後者のアンケート調査では、7名の回答があった（図2）。この数から見ても、実際の来場者に対して回答率が低かったため、もう少し工夫が必要であった。まず、回答者の身分については教職員、一般利用者、学生いずれも1～3名の回答があった。さらに所属の内訳として、法文学部、教育学部がそれぞれ2名、その他が3名となっている。具体的な項目に関しては、企画展の趣旨やパネル、資料内容について質問を行い、いずれも「①良く分かった」の評価となっている。

筆者が特に聞いたかった展示についての意見・感想では、「時宜にかなっている」「夏に開催され、思うところが多かった」「中帰連の活動を初めて知った」「一人でも多くの学生・市民に見てもらいたい」など、ほぼ好意的な感想をいただいた。中でも、「戦争について考えることはこれからの時代にも大切にしたい」と書いた学生の言葉に、企画展を開催した意味があったと実感できた。

2.2 企画展の課題

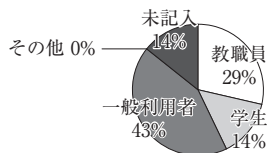
ここでは、アンケート分析を踏まえて、企画展の反省と今後の課題について述べてみたい。

全体的な反省として、やはり学生の来場者が少なかった、という点である。これは、シールでのアンケート用紙に身分を加えていなかったため、実際に

戦争と平和を考える2014アンケート結果

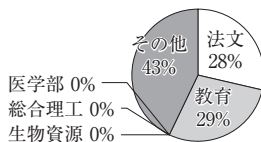
〈身分について〉

教職員	2
学生	1
一般利用者	3
その他	0
未記入	1



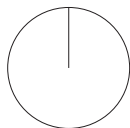
〈所属〉

法文	2
教育	2
生物資源	0
総合理工	0
医学部	0
その他	3



1. 企画展の趣旨について

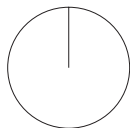
①良く分かった	7
②概ね分かった	0
③あまりよく分からなかった	0
④分からなかった	0



- ①良く分かった
 ②概ね分かった
 ③あまりよく分からなかった
 ④分からなかった

2. 企画展のパネルの内容について

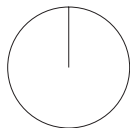
①良く分かった	7
②概ね分かった	0
③あまりよく分からなかった	0
④分からなかった	0



- ①良く分かった
 ②概ね分かった
 ③あまりよく分からなかった
 ④分からなかった

3. 企画展の資料の内容について

①良く分かった	7
②概ね分かった	0
③あまりよく分からなかった	0
④分からなかった	0



- ①良く分かった
 ②概ね分かった
 ③あまりよく分からなかった
 ④分からなかった

4. その他、展示についてご意見・ご感想など

- ・戦争について考えることはこれからの時代にも大切になりたい。(法文・学生)
- ・日本軍が中国に侵略して大犯罪を犯していた事実を再認識したが、若い世代、および今の政治家はその認識もなく、黒を白と言いくるめる無知を何とも思っていないのを恐ろしいと思う。日本は危険な国になったと思う。(一般)
- ・今まさに「戦争のない世界」について考えるべき時であり、ちょうど夏に向けての開催で、思うところが多かったです。中帰連の活動については知らず、今なお語りつづけておられる事に感銘を受けました。高齢になられていく中で、我々がどう受け継ぐか、考えさせられます。(教育・教職員)
- ・このご時世にあって、図書館が重要かつタイムリーな企画を催して下さったことに感謝します。(法文・教職員)
- ・ビデオ上映があり良かった。戦争とはどういうものか、加害の事実を伝えること、今こそ重要だと感じました。(一般)
- ・時宜にかなった企画に敬意を表します。一人でも多くの学生・市民に見てもらえるよう願っています。(教育・身分記名なし)
- ・今こうした展示は絶対に必要だと思います。(一般)

図2 来場者アンケートその2

どの程度の学生が来場したかは不明なのであるが、展示室にやってくる来場者の様子を時折見ている、多くは一般利用者であった。今回は地域と戦争との関わりがテーマの展示だったため、多くの学生にとっては地元出身でもなければ「身近」なものとは捉えにくかったのかもしれない。今後は、学生にもっと来場してもらえるよう、学生が興味を持ちやすく、分かりやすい展示方法を検討し工夫する必要があるだろう。この点については、来場した教員から「何かの授業とタイアップすると、学生も足が向きやすいのでは」というご指摘もいただいた。次回以降は、教員の授業と連携を取れるように、関係授業をリサーチし、担当教員とも議論を深めながら、企画展に活かせるようにしたい。

また、今回中国の留学生が来場してくれたが、ほとんど日本語が読めないため、パネルの意味を理解するのに、引率した教員が適宜解説をしていた。展示方法についても、留学生向けに英語や中国語でのキャプションやガイドも用意するなど、配慮をするとさらに展示の意義が深まり、良かったのではと感じた。

3 企画展の広がり

3.1 ギャラリートークの開催

企画展を開催中、学内の教員からこの企画展のギャラリートークを島大9条の会で開催したい、という依頼があった。島大9条の会とは、「9条の会」の理念に賛同する島根大学教職員によって、2006年5月に結成された組織で、学生を含め177名が賛同し、学習会などを不定期に開きながら活動している。依頼の内容としては、企画展の趣旨や、資料の解説を行いつつ、地域で戦争を語り継ぐことの重要性などを筆者が話すことで、それをもとに参加者で気軽に議論したいということであった。

筆者もギャラリートークが出来ればと思いながらも、他の業務に追われ、計画できずにいた。そこで、その内容を係長会議に諮り、了承が得られたため、日程調整の結果10月3日18時より開催することになった。当初、先方は展示室を想定していたが、展示室自体がそこまで広くないため、椅子を用意出来ないことから、同じフロアにあるラーニングコモンズにてギャラリートークを行うことになった。人数が全く予想できずにいたが、おそらく10名

程度であろうと考え、こぢんまりとしたイベントになることを予想していたが、実際には20人程度の参加があった。参加者の半数は教員で、残り半数はあさがおの会のメンバーを含めた一般の人々であった（写真5）。



写真5 ギャラリートークの様子

ギャラリートークでは、まず筆者が企画展の趣旨や簡単な山陰中帰連史料に関する解説を

行った後、筆者の解説に対するコメントを担当した教員から、史料を寄贈した難波靖直氏について紹介があり、戦争が「普通の人々」にもたらす影響などについて話があった。その後、再び筆者が引き継ぎ、中帰連についての解説や戦争体験を史料として受け継ぐ事の意義や、図書館の役割について述べた。

その後、フロアも交えたフリートークに移り、一般の参加としてあさがおの会会員から、会の結成経緯や活動について説明があり、中帰連会員の戦争体験だけではなく、自分たちの戦後の体験をも様々な機会を捉えて語り継いでいきたい、という話があった。このフリートークの時間では、教員や一般の方があさがおの会について質問をし、それについて会員が答える、という場面が多くみられた。会の運営や活動の実際については筆者が知らなかった事も多く、話を聞くにつれ、語り継いで行く事の大変さを感じた。

最後に展示室へ移動し、実際に史料を見ながら、時折これまでの来場者の反応なども交えて解説を行った。参加した教員からは、「とても良かった」「地域にこのような組織や資料が残っていたことを知ることが出来て良かった」という声をいただいた。また、一般の方からは、「大学の方と交流が出来て、本当に有意義な時間になった。ありがとう」という声をいただいた。

このように、ギャラリートークは盛況なうちに終えた。

3.2 教養科目「平和学」との連携

企画展終了後の後期から、教養科目「平和学」が開講された。これは、法

文学部をはじめとした様々な専門分野の教員によって、平和に関する講義がオムニバス形式で行われており、受講者も多い。島大9条の会を經由してこの平和学の講義の様子を聞くにつれ、授業で取り上げられている図書を当館で展示できないか、と考えた。

そこで、「平和学」を取りまとめている教員に連絡を取り、ぜひ当館で図書の展示をさせてもらいたい、と相談した。また、展示の際に製作するPOPについても、推薦した教員からそれぞれ可能な限りコメントをつけてもらえるようお願いした。その教員からは快諾を得て、平和

学の各担当教員への依頼やその回答などの窓口になっていただくことができた。この推薦図書は、予想以上に多く寄せられ、12人の教員から、実に28冊の推薦図書をいただいた。しかも、ほぼすべてにコメントを付けていただいていた。そのため、当初予定していた展示用書棚では足りず、急遽展示台を追加するという事態となった。大変ありがたいことである。通常、授業の推薦図書はなかなか情報が寄せられない中で、今回のように多様な教員からの推薦図書展示は珍しく、その意味でも良い事例となったと思われる。

この図書展示を構想したのが、11月下旬であったことから、教員へ依頼し、12月中に推薦図書の中で図書館に所蔵されていない図書については新規購入し、いただいたコメントを入れたPOPを製作する等の準備を行った。展示方法としては、従来図書館で継続してきた図書展示「ブック☆コンパス」とのコラボレーションとして、2015年1月7日よりスタートし、2か月にわたり展示した¹⁹⁾(写真6)。入館ゲートの正面という場所もあってか、学生が足を止め図書を手に取る様子もよく見られた。

一つの企画展をきっかけとし、教員と連携して新たな企画を実施したことは、今後の図書館における展示を考えるうえでも貴重な経験であったといえる。



写真6 平和学の図書展示

おわりに

戦争を体験した人はもちろん、その体験を聞く機会も少なくなっている中、地域の戦争体験、戦後体験をどのように継承していくのか。それは、地域の様々な場所や場面で、意識的に機会を設けて出来るだけ多くの人々に語り伝えていく事が必要であろう。その際、大学図書館は何が出来るのか、どのような役割が求められるのだろうかと考えた時に、このような企画展が図書館としての一つの「答え」となるだろう。山陰中帰連資料のように、戦争や平和を語る史料は、「歴史学」はもとより、「平和学」にも接する史料である。展示を見た来場者が、何を思うのか。それは多様であって良い。その多様さこそ、平和学の基本であり、その多様さから自由に議論していくことが重要なのである。展示を見て「何か」を感じて「考えて」ほしい——そのためには、尾崎がサブジェクトライブラリアンから感じたように²⁰⁾、日頃から世界の出来事に目を向け、様々な視野を拡げておくこと、そして所蔵資料を活かしきるような知識や専門性を自己研鑽していくことが、このような史料を持つ図書館職員として自分に出来ることなのだろう、と考える。

かつて村上が指摘したように²¹⁾、ユネスコ憲章で示された「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」という理念のもと、図書館が果たす役割は、非常に重要なのであるが、現在の図書館界ではかつて全国図書館大会で採択された「訴え」とともに、その意識も風化しているのではないかと感じる。積極的にあらゆる資料を提供する努力を、図書館員は館種にかかわらず実践していく必要があるだろう。学内で「平和学」の講義が開講されることを見ても、図書館に求められている役割は自明である。

今回の企画展は、その実践の一つであるが、この試みを通して、学内の教員や学生、さらには地域の人々との交流が生まれた。ここで深められた地域史料を通しての平和への共通理解は、そこからさらに広がりを見せて新たなつながりが形成されていけよう。今後も図書館という「場」を通して、「戦争と平和」を思い、理解していく意識の土壌を形成することに寄与したいと考えている。

付記

企画展を開催するにあたり、当館の広報チームおよび情報サービスグループのスタッフには様々な助力をいただいた。また、山陰中帰連を受け継ぐあさがおの会代表西村弘命氏には、多忙な中貴重な資料の貸借に尽力いただいた。ほか、法文学部の関耕平先生、竹永三男先生にはギャラリートークの開催を呼びかけていただき貴重な経験をさせていただいた。そして同学部の片岡佳美先生には、平和学との連携において様々なご足労をおかけしお世話になった。記して御礼申し上げます。

注

- 1) 最近の論文では、田中麻巳が大学図書館の展示の実態や図書館員の認識に関して検証・分析している。田中麻巳. 大学図書館における展示の実態と図書館員の認識. 大学図書館研究. 2014年, (101), p83-92.
- 2) 米澤誠. 特集. 図書館の発信情報は効果的に伝わっているか? : 広報としての図書館展示の意義と効果的な実践方法. 情報の科学と技術. 2005年, 55 (7), p 305-309.
- 3) 篠塚富士男. 特集. わが図書館のコアコンピタンス: 大学図書館における展示会活動: 図書館展示の分析および筑波大学附属図書館の事例報告. 大学図書館研究. 2007, 80, p43-53.
- 4) 島根大学憲章では、「知と文化の拠点として培った伝統と精神を重んじ、『地域に根ざし、地域社会から世界に発信する個性輝く大学』を目指すとともに、学生・教職員の協同のもと、学生が育ち、学生とともに育つ大学づくりを推進する」と謳っている。URL: <http://www.shimane-u.ac.jp/introduction/policy/mission/>を参照。
- 5) 90、91年の特集は「図書館の異文化サービス」をテーマとしていた。
- 6) 図書館反核平和の会設立準備有志. 図書館反核平和の会設立のためにご協力を。(反核・平和の運動を考える〈特集〉). 図書館雑誌. 日本図書館協会. 1984-08, 78 (8), p478-480.
- 7) 村上美代治. 「図書館反核平和の会」の活動と今後の課題について。(戦後50年—図書館と平和〈特集〉). みんなの図書館. 図書館問題研究会. 1995-08, 220, p38-42.
- 8) 村上前掲論文, p40.
- 9) 村上前掲論文, p41.
- 10) 同上。

- 11) 日本図書館情報学会総務委員会. 日本図書館情報学会メールマガジン. 2004-10-14, No.099. (<http://www.jslis.jp/mm/MM099.TXT> (2015-01-20参照))
- 12) 尾崎文代, 和田由季. 北欧平和学図書館調査報告および平和学関連事業計画. 大学図書館研究. 大学図書館研究編集委員会. 2005-08-01, 74, p65-73.
- 13) 企画展の様子については、島根大学附属図書館のブログにも掲載している (<http://shimadai-lib.hatenablog.jp/entry/2014/07/03/132649>)
- 14) 島根大学学術情報リポジトリSWAN (<http://www.lib.shimane-u.ac.jp/0/collection/repo/>)
- 15) 小林奈緒子. 戦争体験といかに向き合うか：山陰中国帰還者連絡会の活動を事例として. 山陰研究. 島根大学. 2011-12-31, 4, p37-56.
- 16) 竹永三男. 初代松江市長福岡世徳：その旅と松江振興策. 山陰研究ブックレット2. 島根大学法文学部山陰研究センター, 2013. などに詳しい.
- 17) 群衆出版社 and 長城(香港)文化出版公司. 覚醒：日本戦犯改造紀實＝目覚め：日本の戦犯の教育と改造の記録＝Awakening：a record of educating and reforming of the Japanese war criminals. 羣衆出版社, 長城(香港)文化出版公司, 新華書店總店北京發行所(発行), 1991.
- 18) 中国帰還者連絡会の機関紙. 1997年6月より発行。現在は「NPO中帰連平和記念館」より刊行を続けている。
- 19) 展示の様子については、当館のブログ (<http://shimadai-lib.hatenablog.jp/entry/2015/01/07/141342>) を参照。
- 20) 尾崎前掲論文, p72.
- 21) 村上前掲論文, p40-41.

